

つぎの二話から典型的な例を指摘してみます。

「めしを食わない嫁さん」

むかし、ある山の中に、若いきこりが住んでいました。きこりは、毎日山で仕事をしていましたが、弁当を食べるとき、いつも、

「ああ、なんとかして、飯を食わない嫁がほしいなあ」と、ひとりごとをいっていました。

ある日のこと、きこりがまた、

「ああ、飯を食わない嫁がほしいなあ」というと、すぐそばの木が、

「それなら、わたしが嫁になりましょうか」といいました。つるりとした美しい木でした。

「なんだって。おまえが嫁になんかなれるのか」ときこりがいうと、木は、

「なれます」といって、くるつと、いい嫁さんになりました。きこりは、

(いい着物着て、飯食わないで、まあいい嫁だ)と思って、その木を嫁さんにしました。

きこりと嫁さんはいっしょに暮らしはじめました。

ある日、きこりが山へ出かけていたときのことです。ひとりの村人が、きこりの家にたち寄りしました。見ると、嫁さんが、大釜いっばいに飯をたいていました。まだ昼飯時でもないのに、おかしいなあと思って、

「その飯どうするんだ」とききました。嫁さんは、

「ああ、これですか。山へ持っていくんですよ」と答えました。村人は、

(あんなたくさんの飯、山に持って行って、だれに食わせるんだ)とふしぎに思って、そっと隠れてのぞいていました。

嫁さんは、大釜いっばいにたい飯を、ぴつつ、ぴつつと握り飯にして、台の上いっばいに並べてから、頭の髪をザクツと割りました。すると、大きな口があらわれました。嫁さんは、握り飯をみんな、頭の口のなかへシットンシットンシットンと入れて、ぺろつと食べてしまいました。

さあ、村人はびっくりしたのなんの、腰をぬかしてはって逃げていきました。すると、きこりが山から帰ってくるのに出会いました。そこで、

「おまえ、飯食わない嫁がほしいっていったけど、飯食わないどころじゃない、一日五升飯食う嫁だ。あれはただの人間じゃない。鬼か蛇にちがいないから、追い出したほうがいいぞ」といいました。

つぎの日、きこりは山へ行ったふりをして、梁に上がって見ていました。

嫁さんは、大釜いっばいにぴちつと飯をたいて、ぴつつ、ぴつつと握り飯にして、台の上いっばいに並べてから、頭の髪をザクツと割って、握り飯をみんな、頭の口のなかへシットンシットン

村人：きこり

村人：嫁さん

きこり：嫁さん

ンシットンと入れて、ペろつと食べてしまいました。きこりは、びっくりして、
 (これはただもんじゃな。鬼か蛇にちがいない) と思いました。そして、山から帰ったふりを
 していました。

「そろそろ五月の節句だ。おまえ、里帰りでもしてこないか」

嫁さんは、

「そんなら、あんたもいっしょに行ってくれるかい」といいました。木こりは、しかたなく、

「そうだな」といって、嫁さんといっしょに行くことにしました。

ふたりは出かけましたが、嫁さんは、

「あの山の向こう。その山のもうちよつと向こう。この山の向こう」といいながら、どこまでも
 どこまでも歩いていきます。どこまで行っても家一軒見えません。木こりは、

「おれ、便所に行きたくなったから、先に行ってくれ」といって、嫁さんを先に行かせました。
 そして自分は、わらわらと走って逃げました。

嫁さんは気がついて、

「このやろう。どこまで逃げたって逃がさないぞ」といって、鬼になって、ブーンブーンと追いかけてきました。走っても走っても追いかけてきます。(もうだめだ) と思ったとき、よもぎと菖蒲がいつぱい生えているところに来ました。きこりは、そこに飛びこんで、ひたつとつぶせになって隠れました。

鬼はブーンブーン飛んできて、きこりを見つけると、怒って、

「こんなところにいたな。ひとおもいに食ってしまいたいけれど、この中に入ればおれの命がない」といいながら、きこりのまわりをブーンブーン走りまわりました。鬼は、

「よもぎと菖蒲じゃからだが溶ける」といいながら、いつまでも走っていましたが、どうすることもできないで、どこかへ消えてしまいました。

それで、五月の節句には、よもぎを屋根にさしたり菖蒲を軒先にさしたりして、魔よけにするのだそうです。

とんびすかんどねっけど

「まほうの鏡」

昔むかし、あるところに、ひとりの狩人がいました。*狩人は、毎日森へ狩りに出て、たくさんのえものをしとめました。

ところがある日のこと、いつものように狩りに出て、夕方まで走りまわりましたが、えものは

いっぴきもとれませんでした。狩人は、

(えものを見つめるまでは、家に帰らないぞ) と思って、そのばんは森の中でねました。

朝になって、海辺^{うみべ}までやって来ると、すなはまに大きな魚がいっぴき、うちあげられてもがいていました。狩人は、魚を海の中に投げもどしてやりました。すると、魚が、

「お礼に、何をさしあげたらいいでしょう」といいました。狩人が、

「何もいらないよ」と答えると、魚は、

「では、私のうろこを一枚^{いちまい}お取りなさい。助けが必要^{ひつよう}になったとき、そのうろこをもやせば、すぐにあなたのもとにかけつけますから」といいました。

狩人は、魚のからだからうろこを一枚取って、ポケットに入れました。

それからしばらく歩いていくと、野原に出ました。そこに、とてつもなく大きな木が一本はえていました。狩人はその木の下でひと休みしました。うとうとしていると、何かの音で目がさめました。起きあがってあたりを見まわすと、大きなへびがいました。へびは、木の上のワシの巣^すをねらって登っていくところでした。巣の中にはひな鳥たちがいるだけで、親のワシはいませんでした。狩人はすぐさまつぼうをかまえて、へびをうちこりました。そして、また横になってねむりました。

狩人：へび

しばらくすると、親鳥たちが巣にもどってきました。そして木の下に狩人を見つけると、いつもひな鳥を取っていくのはこいつだなと思って、おそいかかろうとしました。そのとき、ひな鳥たちがさけびました。

親鳥：ひな

「その人に手を出さないで。その人は、へびをやっつけてくれたんだよ」
それを聞くと、親鳥たちは、羽を広げて、ねむっている狩人のためにかげを作ってやりました。

やがて、狩人が目をさますと、親鳥たちは、

「子どもたちを助けてくださったお礼に、何をさしあげたらいいでしょう」といいました。狩人が、

「何もいらないよ」と答えると、親鳥は、

「では、私のしっぽの羽を一枚お取りなさい。助けが必要になったとき、その羽をもやせば、すぐにあなたのもとにかけつけますから」といいました。

狩人は、ワシの羽を一枚取って、ポケットに入れました。それから、また狩りをして歩きましたが、その日もやっぱり、えものはいっぴきもとれませんでした。

狩人：ワシ

狩人：きつね

つぎの日の夕方になって、ようやくきつねをいっぴき見つけました。狩人は、「ほお、いいところにあらわれたぞ」といって、ねらいを定めました。するときつねが、「どうぞ、わたしをうたないでください。かわりに、あなたのおのぞみの物をさしあげますから」といいました。狩人が、

「いったい、何をくれるんだい」ときくと、きつねはいいました。「どうぞ、わたしをせなかの毛を一本取ってください。助けが必要になったとき、その毛をもやせば、すぐにあなたのもとにかけつけますから」

狩人は、きつねのせなかから毛を一本ぬいてポケットに入れ、またどンドン歩いていきました。やがて、ある国にやってきました。その国のおひめさまは、なんでも見えるまほうの鏡かがみを持っていました。おひめさまは、国じゆうに、こんなおふれを出していました。

「わたしの目の前からすがたを消して、三日たってもわたしが見つけられない人とけっこんします。もし、かくれているのが見つかったら、その人は打ち首です」

これまででたくさんの若者わかものが挑戦ちようせんしましたが、みな失敗しっぱいしておひめさまに見つかり、打ち首にされました。おひめさまはその首で高い塔とうをたてさせました。

狩人はこれを聞くと、自分も挑戦しんせんしてみました。

狩人がお城しろに行くとき、かくれるために三日間があたえられました。狩人は、はじめの二日間は、お酒を飲んで歌ったりおどったりして楽しくすごしました。「三日たったら、首を切られるんだぞ」と人にいわれても、狩人はただわらうばかりです。

三日目、狩人は、海辺へ出かけていって、あの魚のうろこをもやしました。たちまち、大きな魚が泳いできて、

「なんのご用ですか」とききました。

「ぼくを、かくしてくれ。だれにも見つけられないところへ」

魚は、狩人を飲みこんでのどの中にかくすと、深い海のそこへもぐっていきました。

おひめさまは、まほうの鏡をのぞいて世界じゆうさがしましたが、狩人は見つかりません。「これで終わりだわ。あの人とけっこんしなくては」

ひとりごとをいいながら、おひめさまは、もういちど鏡をのぞきこみました。すると、深い海のそこに大きな魚がいっぴきいて、その魚ののどから、青いぼうしのふさかざりがちらつとのでいでいました。

「見つけたわ。魚ののどの中にいるわ」と、おひめさまはさげびました。

狩人：魚

狩人：おひめさま

狩人がもどってきて、

「どうです。わたしを見つけれましたか」ときくと、おひめさまは、

「あなたは、魚ののどの中にかくれていましたね」といいました。

「そのとおりです。しかたがありません。わたしの首を切ってください」

けれども、おひめさまは、

「あなたほど上手にかくれた人は今までいませんでした。だから命はとりません。どこへでも行ってしまいなさい」といいました。

しばらくすると、狩人は、

(もういちどおひめさまのところへ行つてためしてみよう。首がなくなつたつてかまいやしない)と考えました。そして、お城へ出かけていきました。

こんどは、狩人は、野原へ出て、ワシの羽をもやしました。たちまち、ワシがとんできて、

「なんのご用ですか」とききました。

「ぼくを、かくしてくれ。だれにも見つけれないところへ」

ワシは、狩人をせなかに乗せて空高くまいあがり、天のはてまでとんでいきました。

おひめさまは、まほうの鏡をのぞいて世界じゅうさがしましたが、狩人は見つかりません。

「こんどこそ終わりだわ。あの人とけっこんしなくては」

そういつて、さいごにもういちど鏡をのぞきました。すると、天のはてをわしが一羽とんでいて、そのせなかで青いぼうしのふさかざりがひらひらしていました。

「見つけたわ」と、おひめさまはさけびました。

狩人がもどってきて、

「わたしを見つけれましたか」ときくと、おひめさまは、

「あなたは、ワシのせなかに乗っていましたね」といいました。

「そのとおりです。さあ、わたしの首を切ってください」

けれども、おひめさまは、

「いいからお帰りなさい。こんども命を助けてあげましょう。でも、もう二度と来てはいけませんよ」といいました。

ところが、しばらくすると、狩人は、またお城に出かけていつて、

「もういちどやってみます。三度目も失敗したら、どうぞ心おきなくわたしの首を切ってください」といいました。

狩人：ワシ

狩人：おひめさま

狩人：きつね

狩人は、こんどは森へ行つて、きつねの毛をもやしました。たちまち、きつねがあらわれて、「なんのご用ですか」とききました。狩人は、きつねにいいました。

「ここからお城の中まで、あなをほつてくれないか。おひめさまが鏡を見るときすわる、いすの下までほつてほしいんだ」

きつねはすぐにあなをほりはじめました。あなができると、狩人はもぐつていつて、おひめさまのいすの下にかくれました。そして、おひめさまがしきりに鏡をのぞきこんでいるあいだ、いすの下から、針^{はり}でおひめさまのおしりをちくちくさしました。

おひめさまは、世界じゆうさがしましたが、こんどはどうしても見つけられませんでした。

狩人がもどつてきて、

「どうですか。わたしを見つけられましたか」ときくと、おひめさまは、

「いいえ、見つけられなかったわ。いったいどこにかくれていたの」といいました。

「わたしは、あなたのいすの下にかくれていました。そして、あなたが鏡を見ているあいだ、針であなたをつつつきました」

おひめさまはそれをきくと、

「ああ、なんだかちくちくしたのはそれだったの」とさげびました。

こうして、狩人はおひめさまとけっこんして王さまになり、ふたりはいつまでもしあわせにくらしました。